2025年7月6日　市川福音キリスト教会（イザヤ53篇1～5節）

キリスト者の謙遜

Ⅰコリント4章6～13 節

はじめに

先週は白石剛史先生がコロサイ1章15節から「本質を見つめて」と題して説教して下さいました。原稿を読ませていただきましたが、とてもすばらしい内容でした。聖餐のパンとブドウ酒はそれ自体に意味や力があるアイドルではなく、神との接触点、アイコンであるということでした。すべて、人間もイエス様も教会も聖餐式も洗礼式も牧師も、全て霊である父なる神様の愛や正義や真理、永遠のいのちなどを見出す接触点であるということでした。

１、　コリント教会の人々の高ぶり（6～7節）

6～7節「兄弟たち。私はあなたがたのために、私自身とアポロに当てはめて、以上のことを述べて来ました。それは、私たちの例から、「書かれていることを越えない」ことをあなたがたが学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して思い上がることのないようにするためです。いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、人からもらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら。なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」

パウロは、自分とアポロのことを例に挙げながら、教会の教師は神の奥義の管理者であり、管理者に求められるのは忠実であると語りました。「書かれていることを越えない」とは、聖書に書かれていることを越えないと言うことです。パウロは聖書の教えを引用しながら、聖書に従ってコリントの教会に教えました。牧師は神の奥義の管理者として、聖書を越えないという姿勢を教会が身に着けることを心がけます。説教において聖書を越えて語らないように注意します。

聖書の教えを現代の日常の課題に適用できるように具体的に語りながら、書かれていることを越えないということは、実はなかなか難しいことです。体験を語るのではなく聖書を語る。しかし、聖書の説明で終わらず、聖書に感動し、聖書の真実を体験しながら語ることを心がけます。

6節「思い上がる」という動詞は、新約聖書に7回出て来ますが、そのうち6回はⅠコリントに出てきます。「思い上がる」のがコリントの教会の問題だと

いうことが、こういうところからも窺えます。
　パウロにつく、アポロにつくなどと仲間割れするのも、聖書に書かれていることに聞き従おうとせず、勝手なことを考える。これらのことは「思い上がり」であると言うのです。
　「あなたには、何か、人からもらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら。なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」
　いのちをもらい、育ててもらい、教育を受けさせてもらい、健康をもらい、働くことをもらい、訓練と経験をもらい、先輩をもらい、同僚をもらい、赦してもらい、期待をもらい、助けてもらいながら、すべて自分でやっているように誇る。そうではないでしょう、とパウロ言うのです。
　クリスチャンは神さままかせ、他人まかせではなく、自らの決断と努力を忍耐によって道を切り開きます。すべてのものを与えられていることを感謝しながら、そうするのです。

２、　王様のようだ（8節）

　皮肉を言うのはあまりほめられたことではないかもしれませんが、時には皮肉が事実をあぶり出すということがあります。ここがそうです。
　8節「あなたがたは、もう満ち足りています。すでに豊かになっています。私たち抜きで王様になっています。いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったのです。そうすれば、私たちもあなたがたとともに、王様になれたでしょうに。」
　王であるキリストは仕える者となってくださいました。仕えられるためではなく、仕えるために、神の栄光を捨てて、私たちと同じ人になって下さいました。確かに私たちクリスチャンは、このキリストと結び合わされて、神の国の世継ぎとされました。やがて天において神と共に治めるという約束をいただいています。
　そして、地上においても誰にも支配されない王として生きる、というのもこれまた真実です。しかし、この世にあって私たちは、キリストが仕えられたように仕える者として遣わされているのです。
　コリントの教会の信徒たちは、そのことを忘れて王様気分でいる、とパウロは痛烈に皮肉っています。「いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったのです。」
　コリントの人たちが、皆さん王様気どりだったとは思いません。しかし、仕え合う者にはなっていなかったのです。パウロにつく、アポロにつくなどと仲

間割れしているのも、その結果だったのです。

３、私たちは愚かで、弱く、卑しめられている（9～10 節）

パウロは、ここまで我慢して言わなかったことを、語り始めます。語り始めると止まらない、という感じです。パウロも人間だなと思うと同時に、使徒という職務の尊さを考えると、驚くような言葉が語られます。

９節「私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。」

パウロは、使徒たちとは、円形劇場での見せ物の最後に登場する剣闘士（グラディエーター）のようだと言うのです。彼らは多くの場合死刑囚でした。死刑が決まっている者同士が生き残りをかけて殺し合う、あるいは猛獣と戦わせる。それを見物にしたのです。教会を世界に建て上げて行く尊い職務を与えられた使徒たちは、全員が殉教したと考えられます。

10 節「私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。私たちは弱いのですが、あなたがたは強いのです。あなたがたは尊ばれていますが、私たちは卑しめられています。

ここも皮肉が効いていますいます。あなた方はキリストにあって賢い者、強く、尊ばれている。それに対して使徒たちは、キリストにあって愚かな者、弱く、卑しめられている、と言うのです。

本日の招きの詞、イザヤ書 53 章 2 節から 3 節にこうありました。

「彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった」

これはキリストについて語られた預言だと考えられます。そして、今、パウロをはじめとする使徒たちは、キリストのように愚かな者とされ、弱く、卑しめられているのです。

３、　キリストに似た者（11～13 節）

続くパウロの言葉を見る時、自己肯定感がなさすぎ、ここまで卑下するのもいかがなものだろうかと思われるかもしれません。しかし、パウロは決して自己肯定感が低いわけではありません。

彼はピリピ 3 章 5 節以下のところでこう言います。「私は生まれて八日目に

割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義について非難されるところがない者でした。」

大変な自負、自己肯定感の高さです。

ですから、自己肯定感の低さから言っているのではありません。これが使徒パウロの実際の生涯であり、リアルな体験だったのです。

11～13 節「今この時に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、ひどい扱いを受け、住む所もなく、労苦して自分の手で働いています。ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、中傷されては、優しいことばをかけています。私たちはこの世の屑、あらゆるものの、かすになりました。今もそうです。」

人としてこの世に来られたキリストを十字架に架けた兵士たちは、イエスの顔に唾をかけ、拳で殴りました（マタイ 26 章 67 節）。

主イエスは、こうも語られました。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません」（マタイ 8 章 20 節）

ペテロは言います。「このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方におまかせになった」（Ｉペテロ 2 章 21～23 節）

使徒たちは、全世界に出て行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝えます。それは、主キリストの生涯をなぞるような生活だったのです。

おわりに

今日は聖餐式があります。白石先生は、パンとぶどう酒というアイコンは、それをとおして神との接触点とすることが大切なのだと教えられました。私たちはキリストのパンとぶどう酒をいただくとき、キリストとかけ離れた生き方をするのではなく、キリストのように生きる者へと変えられます。

キリストによって聖別された、取り分けられたあなたになりましょう。キリストにあってそれぞれの家族、職場、地域に出て行く者となりましょう。主は言われました。「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから」（マタイ 5 章 11～12 節 a）